大巌寺宝物殿ニュース 第22号

当山『日鑑』に見る行事の諸相 ⑨ 千部修行(3)

大巌寺住職　長谷川 匡俊

千部修行がいかに大行事であったか、前号までの叙述でお分かりいただけたことと思う。そこで今号では、当山所蔵の『住誉代千部録』に記された「寅年千部入用」(明和七年 一七七〇)並びに「巳年千部諸入用之控」安永二年 一七七三)から読み取れる事柄を紹介してみよう。

ただ残念なことに、本史料には、「先代之千部録ニ者千部中日々収納之方も委細書付有之候得共、是者納戸江相納り」とあって、行事に要した支出のみ記録され、収入については納所で扱っているという。それでも、「唯万人講勧入入金」だけは積立金なので計上しているとある。記載されている全費目は両年とも諸法礼・謝礼から始まって行事の設営に必要な経費、一切の品々、飲食に関わるものまで総計七七項目にわたる。なお明和の記録には、結びに「諸般大抵御先代ニ相違事無御座候」とみえる。例年あまり大きく変わることはなかったということであろう。

さて、明和七年の支出総計は、金六九両三歩、銭七九一文。万人講勧入は 銭三貫四〇〇文であったが、安永二年になると、金一〇一両一歩、銭二〇九文。万人講勧入は 金三歩、銭五貫一〇〇文と、大きな変化がみられる。およそ三〇両にも及ぶ支出増である。その理由にあたる事柄が史料の末尾に記されている。内容は以下の通りである。

第一は、すべての出勤僧に「加布施」(これまで以上の布施額のこと)を遣したことだという。そのわけは、増上寺の練城和尚が申されるには、「楽人称名衆」などは、「施物」があまり少額だと、遠方から参ることができなくなる。二年おきに千部修行を行うには「施物御加増」をお願いしたい。そうすれば今後とも頼みやすくなる。また末寺中に対しても「加布施」をすれば、みな快く出仕してくれるだろうから、そうしてはどうかと助言されたことがわかる。

第二は、よって今回は「楽人称名衆末山等ニ至迄不残加布施」を遣わしたという。加えて、近年における江戸市中での諸物価高騰、ことに「此辺田舎者卯辰両年之干損」で、当山の年貢米なども「一向皆無同様之仕合」にある。それゆえ「飯料等不残買立」てる始末であったので、思いのほか物入りが多くなってしまった。さらに当年は、当山二六世練誉雅山上人の御年忌にあたり、小金東漸寺住職の御出座も加わって経費が高額に上ってしまったという。

第三は、上述の「加布施」などに関して、その対応は「其の時々之御代之思召ニ可有之御事」と、これを恒常化するのではなく、時の住職が内外の状況に即して判断されるよう含みを残していることである。以上

結びに、本行事の安全管理などに関して二点ほど触れておこう。一つは、生実代官の「取持」が欠かせないこと。たとえば、「千部中日々足軽壱人宛役所江相詰見廻り」と、警備を依頼していることがわかる。もう一つは、領民の協力を得ることであり、惣百姓から次の一札をとっている。

差上申一札之事

一博打諸勝負事者前来御制禁ニ御座候処、今般千部御修行ニ付、猶又別而厳重ニ相慎候様、尤他所より入込候者数多有之候得者、時々心を付聊も右躰之儀無之様被仰渡一同奉畏候、若心得違之儀有之勝負ケ間敷儀有之候ハ者、如何様之越度ニも可被仰付候、為後日仍連印仕差上□所如件、

寛政元酉年三月

御地頭所・御納所　(組頭・名主ほか)

発行所　大巌寺文化苑
住　所　千葉市中央区大巌寺町一八〇
電　話　〇四三(二六一)二九一七